

難波西鶴と 海の道

【38】

森田 雅也

西鶴のころ、西回り航路の開発によって、琵琶湖の流通ルートを使った運送量は激減していきますが、そのころの大阪の人々を描いたのが、西鶴の『日本永代蔵』(「元禄元(1688)年刊」巻二の二「怪我の冬神鳴」)です。

西鶴はこの話をしようゆ屋の商人喜平次の視線を通して描くという手法で用いています。他の西鶴作品では

「懐硯」の伴山法師以外では珍しい視点人物の設定です。

その喜平次は、世の中の貧富の差を大變うがった視点で見えています。

「我、商に廻れるさきさきにも、世は愁喜貧富のわがち有りて、さりとは思ふままならず。かしこき人は素紙子きて、愚かなる人はよき絹を身に纏ねし。とかく、一仕合は分別の外ぞかし。然れども、その身働かずして、銭

行商人喜平次の視点

が一文、天から降らず地から涌かず。正直にかまへた分にも、埒は明かず。身に応じたる商売をおろそかにせし」

喜平次は行商していると、世の中には、憂いに沈む人、喜びあふれる人、貧しい人、金持ちの人とわかれていて、これらの人が立場を入れ替わることは、容易ではない、世の中、賢い人ほど素紙子のよいうな貧しい衣をまとい、愚かな人ほど上等の絹の衣を重ね着していると云うのです。

だからといって、ひともうけして金持ちになれるかどうか(一仕合)は、思慮分別のいい悪いではない、とす

世態人情を観察している行商人の目なのです。いわば、喜平次の言葉は、大津に限らず、当時の庶民の代表者の言葉と云えるのです。

では、生きるために、はどう処したらいいか。とにかく、働かないでは、銭一文として天から降ってこない、地からも湧いてこないのです。ただただ、正直にしても、どうにもならない、解決策は身に応じた商売をおろそかにしないことだ、と結論するわけです。

夢がないというより、無学なしょうゆ売りが、大津で現実と対峙しているうちに体得した教訓といえるでしょう。そんな喜平次が最初に紹介する大津の

当時の庶民の代表

人は、関寺(今の天津市津坂二丁目)のほとりに住む森山文好という医者です。

元々はそれなりの医者だったのですが、ある時、簡単な風邪を治せず、評判を落とす、まったく来診する患者も絶え、関古鳥が鳴く医院になってしまいました。この様を、「医師も傾城(遊女)の身と同じ、呼ばぬ所へはゆかれず」と言い放つのですから、誠に憂快

です。

玄好は仕事のないことを隠すため、毎日往診のふりをして神社の絵馬ばかり見て遊んでいるので、付いたあだ名が「絵馬医者」。

つらい人生ですね。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)